

「こころとからだのアンケート」集計結果に関する報告書について

令和2年6月の学校再開時に全市立学校（幼稚園除く）で実施した「こころとからだのアンケート」の集計結果をとりまとめました。

集計結果では、学校再開時の児童生徒は概ね安定していた状況であることが伺えるとともに、項目の相関関係の分析では、「学校生活を楽しみと感じる」「休業期間中に家族との親密な関わりがあった」「休業期間中に規則正しい生活を送っていた」とする子どもたちは、ストレスの度合いが低い傾向にあることなどが分かりました。

各校では、これまでから自校のアンケート結果等から、注意を要する児童生徒に対して個別の要因を見極めた支援に取り組んでいるところですが、本報告書を踏まえ、子ども達の生活習慣の定着や安心できる学級・学校づくりに、家庭等とも十分な連携を行いつつ、組織的な取組を一層推進してまいります。

記

1 アンケートの概要

(1) 内容・種類

4要因で全26の質問項目（※1）に、4件法（※2）で回答。

発達段階等に合わせ表現等を工夫した小学校の低学年版（小学校1～3年生対象）、高学年版（小学校4～6年生対象）、中学・高校版の3種類を作成。

※1 ストレスの度合い（17項目）、学校生活への楽しみ（3項目）、休業期間中の家族との関係（3項目）、休業期間中の生活の規則正しさ（3項目）の4要因

※2 質問に対して「あてはまらない(1点)」「あまりあてはまらない(2点)」「少しあてはまる(3点)」「あてはまる(4点)」の4件法で回答を行い、その合計得点から児童生徒の状態を把握。

なお、「ストレスの度合い」は17点（最低値）～68点（最高値）となり、点数が低いほど肯定的（ストレス度合いが低い）であることを表す。一方、「学校生活への楽しみ」「休業期間中の家族との関係」「休業期間中の生活の規則正しさ」の3要因は3点～12点となり、点数が高いほど肯定的（学校生活を楽しみにしている等）であることを表す。

(2) 実施対象

市立学校（小・中・小中・高・総合支援）244校中242校（約99%）

※すでに同趣旨のアンケートを行った2校は、本アンケートを実施していない。

市立学校児童生徒94,536人中、92,562人が回答（約98%）

2 主な集計結果

(1) 結果概要

① 「ストレスの度合い」

学校再開時における児童生徒の状態は、概ね安定していることが伺えたが、中学生以降、ややストレスが高くなる傾向が見られた。

一方、高い点数を示す児童生徒も一定数いるため、一人一人の要因を的確に見極め、適切な支援を行う必要があることも明らかとなった。

② 「学校生活への楽しみ」

全学年で肯定的な回答となる比較的高い点数となり、多くの子どもたちが、学校生活を楽しんでいることが伺えた。一方、低い得点を示す児童生徒も一定数おり、「ストレスの度合い」と同様、児童生徒の状況に応じた適切な支援を行う必要があることも明らかとなった。

③ 「休業期間中の家族との関係」

全学年で肯定的な回答となる比較的高い点数となり、多くの子どもたちが、休業期間中に家族との親密な関わりがあったことが伺えた。一方、低い点数を示す児童生徒も一定数おり、家庭との連携などの支援を行う必要があることも明らかとなった。また、全ての学年を通じて、一貫して女子の方が男子よりも点数が高く、家族との関わりが多いと感じていることが示唆された。

④ 「休業期間中の生活の規則正しさ」

小学生では、全学年で休業期間中に規則正しい生活をしてきたことが伺われたが、中学生では学年が上がるにつれて生活が不規則になる傾向があり、高校生でも中学校 3 年生と同程度の結果が見られた。

⑤ 「育成学級，総合支援学校児童生徒」

普通学級との比較において、概ね同じ傾向であった。児童数が少ないため、必ずしも全体的な傾向とは言えないが、総合支援学校小学部の「ストレスの度合い」が普通学級に比べて高いという傾向が見られた。

(2) 調査対象の4要因の関連

① 「ストレスの度合い」「学校生活への楽しみ」「休業期間中の家族との関係」「休業期間中の生活の規則正しさ」間の関連を見ると、「学校生活を楽しんでいる」や「休業期間中に家族との親密な関わりがあった」「休業期間中に規則正しい生活を送っていた」とする子どもは、どの年代でも「ストレスの度合い」が低い傾向が見られた。

② また、「ストレスの度合い」に影響を与える要因について質問項目を詳細に分析した結果、各年代に固有の特徴としては、小学生では、「早寝早起き」の子どもの「ストレスの度合い」が低く、中学生では、「早寝早起き」の影響は低下するものの、「家族と過ごす気持ちが落ち着く」と感じていた子どもは「ストレスの度合い」が低かった。また、高校生では中学生の傾向に加えて、「学習習慣を維持できていた」とする子どもの「ストレスの度合い」が低い傾向にあった。